

## 第六章 結論

世間に問ふ、情は何物たるか。直生死相許さしむ<sup>1</sup>。

これは、中国詩人の元好問個人の質問だけでなく、古今東西に問わず、世間男女の共通の質問であろう。

恋とは、人に惹かれる切ない心持というものであり<sup>2</sup>、恋歌とは、恋情の切なさを詠んだ歌である<sup>3</sup>。そして、『古今集』の「恋歌」は第二章で述べたように「忍び恋、悲恋を詠むもの」なのである。要するに、『古今集』における恋の主題は「切なさ」なのである。

では、『古今集』恋歌の歌々は、「切なさ」という主題を詠む場合に、どのように表現されているのか。

『古今集』の恋部は全体としては恋の進行過程によって配列されるものであり、恋部に配属する歌々には、濃厚な時間性を持つことが本論の第二章で確認していた。このことから、『古今集』恋歌を考察する場合には時間的な要素を見逃してはいけないのだと認められる。また、『古今集』恋歌には「朝と夜」、「夢とうつつ」、「昔と今」、「今と将来」、「長と短」といった時間に関わる主題が見られるが、本論では、歌数が少ない「今と将来」、「長と短」との二つの主題を省略し、「朝と夜」、「夢とうつつ」、「昔と今」といった主題だけを取り上げ、恋歌を分析した。

### 第一節 朝と夜

この三つの主題について、まずは、本論の第三章では「朝と夜」という対照表現を中心に考察した。

「朝と夜」という対照表現が見られる歌々には、主に、①「朝」と「夜」における恋しさの程度の違い、②「朝」と「夜」における悲しみの程度の違い、

<sup>1</sup> 中国詩人元好問の詞による。原文は「問世間情為何物・直教生死相許」。

<sup>2</sup> 恋の定義について、第二章の第一節には詳しい。

<sup>3</sup> 恋歌の定義について、第二章の第一節には詳しい。

③「朝」における絶望と、「夜」への期待、④「夜」の時の逢うことを惜しむ気持ちと、「朝」の時の別れる辛さ、などの心情の変化から起こった「差」、つまり心情の「落差」によって、恋の切なさが伝えられているが、これらの歌々の作者は「落差」から齎した感覚のギャップを通して、恋歌の悲しいムードを作り上げようとした。言い換えれば、「朝と夜」との対照表現は、歌のムードを高める一つの方法として作者に意識的に歌に取り入れられたものだと見られる。

こうした「朝と夜」との対照関係は、『万葉集』にも認められる。たとえば、次の二首の歌である。

ぬばたまの この夜な明けそ 赤らひく 朝行く君を 待たば苦しも  
(万葉・卷十一・二三八九、柿本人麻呂)

あかねさす 昼は物思ひ ぬばたまの 夜はすがらに 音のみし泣かゆ  
(万葉・卷十五・三七三二、中臣宅守)

二三八九歌における「赤らひく」と三七三二歌における「あかねさす」は、ともに「昼」の枕詞であり、「ぬばたまの」はともに「夜」の枕詞なのである。これらの枕詞を通して、「朝と夜」との対照関係が提示されているのである。このことから、「朝と夜」という対照関係が歌に詠まれたのは、『万葉集』には既に存在していることが分かる。にもかかわらず、『古今集』は

明けたてば 蟬のをりはへ なき暮らし 夜は螢の 燃えこそわたれ  
(古今・恋一・五四三、読人知らず)

という五四三歌のように、「蟬」と「螢」という用語を通して、作者の「昼」と「夜」における心情の変化を語っている。言い換えれば、作者は、縁語・掛詞などの修辞法を運用することにより、技巧的に作者の動作や状態を提示したのである。ここにおいて、『万葉集』の歌には、枕詞しか用いられていないこ

とに対して、『古今集』の歌は修辞法が豊かだと認められよう。また、ここの修辞法は対照表現にも見られる。たとえば、『万葉集』においては、「夜」を表すとき、「ぬばたまの」という枕詞はよく用いられた。「朝」を表すとき、「赤らひく」と「あかねさす」との二つの枕詞はよく使われた。ただし、枕詞が多く使用されているとしても、『万葉集』の表現は、多様ではない。これに対して、『古今集』では、枕詞だけではなく、縁語・掛詞などもよく使用されている。同じく「朝と夜」を表現するとしても、「蟬」と「蛩」などの歌語を通して、視覚と聴覚との両方面から、「朝と夜」という主題を導き出したのである。ここにおいて、『古今集』の歌は、表現が豊かであり、『万葉集』より遥かに勝っていると認められよう。

さて、『万葉集』と『古今集』との違いは、表現の面においてだけではなく、時間性の取り扱い方にも示されている。この点について、次の二首の歌からは伺われよう。

我が背子を 今か今かと 待ち居るに 夜の更けゆけば 嘆きつるかも  
(万葉・卷十二・二八六四、作者未詳)

今来むと 言ひしばかりに 長月の 有明の月を 待ち出でつるかな  
(古今・恋四・六九一、素性法師)

この二首の歌は、ともに来ない男を待っている心情を語るものなのだが、『万葉集』の歌には、「夜更け」という歌語を通し、時間を提示した。また、「今か今か」という歌語を通して、作者の待ちわびる心情を強調した。

一方、『古今集』の歌には、「今来むと言ひしばかりに」という二句によって、相手が「来る」と言った時間と、自分がずっと待っている時間との間の時間差が示されている。この中に、「時間の推移」が認められよう。また、男は「今来む」と言ったので、女は「夜」の到来、また相手の到来を期待し始める。「長月の有明の月」が出るのは、明け方ごろである。「長月の有明の月を待ち出でつるかな」との三句では、女は明け方まで待っている失望の心情が詠まれた。

つまり、この歌では女の「夜」から「明け方」までの心情変化が表出されてお  
いるのである。その中に、「夜」から「明け方」までという時間の推移が認め  
られよう。

この二首はともに、「夜」で待っているということを提起したのだが、『万葉  
集』の歌は「夜更け」という単一の時点が示されているのに対して、『古今集』  
の歌は、単一の時点ではなく、夜から明け方までという一つの「時間帯」が提  
示されている。ここにおいて、『古今集』の歌には、時間の対照と推移が認め  
られるが、『万葉集』にはそれが認められないことが分かるのであろう。この  
ことから、『古今集』における時間の推移という点は、『古今集』の歌を詠む  
時の重要な視点なのだと認められ、「朝と夜」という対照表現に関わる歌々を  
詠むとき、時間の推移という点を見逃してはいけないといえよう。

## 第二節 夢とうつつ

「朝と夜」という主題の続きとして、本論の第四章では、「夢とうつつ」と  
いう対照表現を検討した。筆者は恋愛進行のプロセスにより、「夢とうつつ」  
という主題に関わる歌を「夢で逢いたい」、「夢でさえ逢えない」、「夢で逢えた」、  
「うつつで逢えた」、「夢で逢えなくなった」との五段階から考察した。この五  
段階の考察を通して、「夢とうつつ」という主題には二種類の歌があると察せ  
られる。一つは、「夢」における逢いたい気持ちと、「うつつ」における逢え  
ないという情緒との対照なのである。もう一つは、「夢」におけるはかなさと、  
「うつつ」における現実性との対照なのである。

この二種類の歌は逢いたいか逢えないか、儂いか現実的か、といった点にお  
いては、相違点を見せているが、「夢とうつつ」という対照表現を通して恋の  
辛さを語るという点においては、共通点を見せていよう。

さて、夢の歌はそもそも、「実現できない恋慕の情を託した孤愁と無常観」  
<sup>4</sup>に伴っているものである。いわば、「夢」とは、「うつつ」で実現できない  
逢瀬を、実現させたい時間帯なのだと考えてよいものである。作者は「夢とう

---

<sup>4</sup> 小林世津子、同前掲注 146 論文。

つつ」という対照表現を通して、「うつつ」で逢いたいという気持ちを強調しようとする。

ところが、「夢とうつつ」という対照表現は『古今集』だけではなく、『万葉集』にも見られる。たとえば、次のような歌である。

吾妹子に 恋ひてすべ無み 白たへの 袖返ししは 夢に見えきや  
(万葉・卷十一・二八一二、作者未詳)

吾が背子が 袖返す夜の 夢ならし まことも君に 逢ひたるごとし  
(万葉・卷十一・二八一三、作者未詳)

白たへの 袖折り返し 恋ふればか 妹が姿の 夢にし見ゆる  
(万葉・卷十二・二九三七、作者未詳)

この三首はいずれも、「袖（折り）返し」で寝ると、自分の姿が思う人の夢にあらわれるという俗信<sup>5</sup>に基づいて詠まれたものだと見られる。これらの歌には「うつつ」で袖返して、「夢」で相手と逢えたこと通して、「夢とうつつ」との対照的關係が示されている。

『古今集』には、

唐衣 ひもゆふぐれに なる時は 返す返すぞ 人は恋しき  
(古今・恋一・五一五、読人知らず)

という歌のように、袖返しと記されているのではなく、「衣」を返すとして表現されているのだが、この歌も同様に「袖返し」の俗信に基づくものであり、夢で二人が逢えることを期待することを示していよう。つまり、『古今集』のこの歌にも「夢とうつつ」との対照關係が認められるのである。

ここにおいて、『万葉集』にも『古今集』にも「夢とうつつ」との対照的關係

---

<sup>5</sup> 「袖返し」の解釈は青木生子等校注、同前掲注 95 書の頭注によるものである。

係が存在しているが、『万葉集』の三首は「正述心緒」の歌に属し<sup>6</sup>、修辞法には枕詞しか使われていないのに対して、『古今集』は、「ひもゆふぐれに」という句を通して「日も夕暮れに」と「紐結ふ」との両方の意味を示しており、さらに、「唐衣」という歌語を通し、「結ふ」という意を導き出すことが伺われる。ここにおいて、『古今集』のこの歌には「掛詞」と「縁語」が用いられたことが認められるのである。したがって、『古今集』はやはり『万葉集』のほうより、表現が豊かであり、修辞法が多用されていると捉えられよう。

この点について、次の二首の歌を比較することを通して一層明らかになろう。

波の上に 浮き寝せし宵 あど思へか 心悲しく 夢に見えつる  
(万葉・卷十五・三六三九、作者未詳)

涙川 枕流るる うき寝には 夢もさだかに 見えずぞありける  
(古今・恋一・五二七、読人知らず)

この二首の歌は言葉遣い（浮き寝、夢、見える）の面においては、非常に類似しているが、修辞表現はやはり大きく異なる。

具体的に言うと、『万葉集』の浮き寝とは、上陸しないで海上の船中に仮泊するという意味なのである<sup>7</sup>。つまり、『万葉集』のこの歌は実詠の歌として見られるのである。これに対して、「浮き寝」という言葉は、『古今集』の五二七歌においては、涙川に身が浮き漂うほどの独り寝であることを意味する。ここにおいて『古今集』における「浮き寝」と、『万葉集』のそれとは、違う用法として使用されていることが分かる。

また、『古今集』の五二七歌の「うき寝」は第四章で考察したように、「浮き寝」と「憂き寝」と、二つの意味を持ち、掛詞として使われているのである。そのほかに、この歌には「涙川」「枕流るる」などの用語も用いられ、修辞技

<sup>6</sup> 青木生子等校注、同前掲注 95 書の頭注（p 290）によると、二八一二と二八一三との二首は夢に関する正述心緒の歌である。また、二九三七の歌は『万葉集』の分類では、もともと正述心緒に属する。

<sup>7</sup> 「浮き寝」の解釈は『新潮日本古典集成第 55 回—万葉集 4』（青木生子等校注、新潮社、1982、p 159）の頭注によるものである。

巧が駆使されている。これらのことから、『古今集』の歌は、『万葉集』と異なり、実詠的なものではなく、技巧的な歌として見られよう。

以上の比較をまとめてみれば、『万葉集』と『古今集』はともに、「夢とうつつ」という対照表現といった主題の歌が認められるが、『万葉集』の方は、表現が素朴であるのに対して、『古今集』の方は、修辞が豊かである。この修辞は、対照表現にも明白に示されている。いわば、同じく対照表現としても、『古今集』における対照表現は、『万葉集』のそれより歌の雰囲気を作り上げるのに効果的なのだといえるのである。

### 第三節 昔と今

また、第五章で「昔と今」という対照表現においては、(一) 出逢った前の「昔」と、逢ってからの「今」との対照関係、(二) 愛し合った「昔」と、別れてからの「今」という対照関係、この二部分から分析した。

(一) に関しては、作者は、「もし昔で逢わなかったら」という仮定を通して、逢ってからの「今」は「昔」よりも「恋しい」ということを語るのである。すなわち、作者は、「昔と今」との情緒の「落差」を通して、今の恋しい心境を強調したわけである。

これに対して、(二) に関しては、作者は、愛し合った「昔」、つまり愛された時の美しい思い出と、別れてからの「今」、つまり一人の寂しく切ない心情とを対照させ、それを通して、別れてからの「今」の辛さを強調しようとしたのである。ここにおいて、作者はやはり「昔」と「今」との状況の違い、また心境の違いによって、歌全体の切ないムードを作り上げたのである。要するに、「昔と今」との対照表現にもまた「昔」と「今」という二つの時間点から生じた「落差」が認められるのである。

さて、「昔と今」との対照表現といった主題は、『万葉集』の歌にも存在している。

この点について、次の歌を通して伺われよう。

去年見てし 秋の月夜は 照らせれど 相見し妹は いや年離る  
(万葉・巻二・二一一、柿本人麻呂)

去年見てし 秋の月夜は 渡れども 相見し妹は いや年離る  
(万葉・巻二・二一四、柿本人麻呂)

この二首は次の業平の歌に類似している。

月やあらぬ 春や昔の 春あらぬ わが身ひとつは もとの身にして  
(古今・恋五・七四七、在原業平)

この三首は、同じく月に向いて、去年のことを思いながら、あの人の不在を感歎している歌である。

そのなか、『万葉集』の二首は、「昔」で見た月は「今」も変わらずに照っているが、この月と一緒に見た妻だけが変わっていて、いよいよ私を遠ざかって行ったという意を伝えながら、「妹は いや年離る」とあるように、妹の不在を明言したのである。『万葉集』のこの二首においては、「昔と今」といった時間的な対照表現が明白に読み取れるのである。ただし、時間的な対照表現以外に、「妹はいや年離る」という句を通して、私と一緒にいた妹が私の所から離れたというように、「私」と「妹」の間に距離感が置かれている。ここにおいて、『万葉集』のこの歌は、時間性を持つとともに、距離から齎した「空間性」も有しているのである。

これに対して、『古今集』の七四七歌には、あの人の不在が明言されていないが、「わが身ひとつは もとの身にして」とあるように、『万葉集』の歌と同様に「昔と今」という対照表現が示されている。しかし、七四七歌には、さらに一步を進んで、「昔」の月と「今」の月、「昔」の春と「今」の春を読み出し、「月」と「春」を通して、昔の私と今の私を比較するのである。ここにおいて、『古今集』の歌には多重的な対照表現が運用されることが認められるのである。



のみならず、「月」と「春」などの景物を通して、「昔と今」における私の違いを導き出すということからも、『古今集』の歌は、多くの修辞法が駆使されていることが指摘できよう。

一方、『万葉集』の二一一歌と二一一歌は、前述したように時間性のほかに、空間性も持たれている。それに対して、『古今集』の七四七歌は空間性が認められない。このことから、『古今集』の重点は、時間性の問題に置かれており、『古今集』の歌を詠む際に、時間性の問題を看過してはいけないと言えよう。

#### 第四節 『万葉集』と『古今集』における表現上の相違

第二章で述べたように、『万葉集』は全体的には時間の方よりも空間の方を重視していると認められる。それに対し、『古今集』時間的な一面が強く現れ、時間の推移の道が重視されるのである。要するに、『万葉集』の時間性は、時間の一点に留まっているのだが、『古今集』の時間性は、時間の推移を示す形として示されているのである。

『万葉集』と『古今集』とは、時間性というところが異なっているが、「朝と夜」、「夢とうつつ」、「昔と今」などの対照表現から、『万葉集』と『古今集』の時間的な対照表現が見られる。つまり、時間的な対照表現は『古今集』にのみ存在せず、『万葉集』にも認められる。だが、両者の時間的な対照表現は全く同一の表現ではあるまい。

『万葉集』の歌は、時間的な対照を表現しようとしても、やはり空間性の要素を看過していない。これに対して、『古今集』の歌は、時間的な対照を表現しようとする際に、多くの修辞法を運用し、その時間的な推移と作者の心境の変化を際立たせているのである。さらに、『万葉集』にも『古今集』にも、修辞法を運用して、時間的な対照表現を修飾する例があるが、両者の修辞法が異なることによって、時間的な対照表現も無論違ってくる。

このことから、『万葉集』と『古今集』における時間的な対照表現の相違を明らかにする前に、二書の修辞技巧を考える必要がある。二書の修辞技巧

について、鈴木日出男氏が次のように論じている<sup>8</sup>。

古代における比喩的な表現といえば、枕詞もまたその一つの典型であった。(中略) 枕詞と被枕との関係が、同質のイメージでつながりあうことになる。言葉の通じあいの機能という点からいえば、これは同質のイメージを、言葉をかえて繰り返しているともいえる。

(中略)『万葉集』の歌々の物象が個別的で一時的であろうとするのに対して、『古今集』のそれはかえって類型的な様式性をそなえるようになる。(中略)『古今集』時代以後盛んに用いられる掛詞や縁語についてもふれておこう。その掛詞も縁語も、物象を表わす文脈と人間(心情)を表わす文脈とを対応させるしくみになっているからである。同音の二語から成る掛詞は、じつはその二語がそれぞれ物象をさす語、心情に関わる語として重なっていて、心物の二筋の文脈を作り出していく。(中略)『古今集』時代に発達した歌言葉も、それじたい、特定の連想を促す点において、広義の比喩の言葉とみることができる。それとともに、その歌言葉の連想性は、他の表現技法である枕詞・序詞や掛詞・縁語、あるいは見立てや擬人法などと有機的に結びついて、それぞれの技法をきわめて効果的ならしめてもいる。(下線は筆者によるものである。以下同)

氏は『万葉集』に多く認められる枕詞と、『古今集』に多く見られる掛詞、縁語などとを比較し、枕詞は二つのものを「同質のイメージでつながりあう」ことであり、掛詞と縁語は「物象と心象とを対応させる」ことなのだと指摘している。そのうえ、掛詞は「物象を表わす語と心情をさす語が重なっていて、心物の二つの文脈を作り出していく」ものとしているのである。

氏の分析からも、『古今集』の修辞技法の種類は『万葉集』より多いのみならず、修辞技法によって齎した言葉の意味合いおよび連想性も『万葉集』より

---

<sup>8</sup> 鈴木日出男、「古今集の比喩」(『古今和歌集研究集成第2巻—古今和歌集の本文と表現』所収、風間書房、2004)。

広いものだと認められよう。要するに、『万葉集』の修辞法はより単純であり、素朴であるのに対して、『古今集』の修辞法はより抽象的で、技巧的なのだと見られる。この二書を合わせてみれば、全体としては、『古今集』の修辞法が『万葉集』のより豊かであることは疑いがないことであろう。

さらに、『万葉集』には時間的な対照表現が枕詞によって修飾された場合があるが、『古今集』には枕詞のほかに、縁語・掛詞などによって修飾された場合も認められる。たとえば、朝、夜、夢、うつつ、昔、今といった時間に関わる用語は、そもそも対照性を持つものだが、『古今集』の作者は多くの縁語・掛詞などの修辞を通して、「朝と夜」、「夢とうつつ」、「昔と今」という対照性を浮き彫りにして、歌の持つ時間性を強く読者に感じさせたのである。このことから、縁語・掛詞などの修辞は『古今集』においても、また『古今集』における対照表現においても重要な意義を持っていると言えよう。

『万葉集』と『古今集』における修辞の相違に関わる研究について、ほかに、森朝男氏の論述が挙げられる。

「闇のうつつ—縁語の構図」<sup>9</sup>という論文において、森朝男氏は次のように指摘している。

短歌の根底に対比的な表現構造というものが存在し、その構造の中で、対比構造をバランスよく保たしめるために縁語が引き出される。(中略)縁語は一般に懸詞を機縁として成立する場合が多い。(中略)幾重にも縁語を重畳させた歌は、万葉にはない古今以降の歌の特色である。古今の歌を万葉の歌とへだてる表現上の差異の集約的なポイントは、こうした縁語の成熟の有無に存するとも見うるのであるが、その成熟は、歌の内部の語と語の接続が限定された第一義的な接続の限界をのりこえて、新しい別な接続を作ったり、または多義的に多様な接続を同時に作ったりしうようになった結果である。それは語の抽象度の高まりを意味するものであるが、その場合

<sup>9</sup> 森朝男「闇のうつつ—縁語の構図」(『相模国文』第12号、相模女子大学国文研究会、1985)。

に、見てきたように、短歌体の表現に潜在する対比的ないし対立的表現構造が、それを強く支えていると見ることができる。(傍点は筆者によるものである。以下同)

ここにおいて、氏は『古今集』と『万葉集』との表現上の相違は、縁語の成熟の有無という点にあると見ていることが分かる。だが、このような相違は、時間的な対照表現にも示されている。この点を説明するために、六六五の歌を改めて見てみよう。

満つ潮の 流れ干る間を あひがたみ みるめの浦に よるをこそ待て  
(古今・恋三・六六五、清原深養父)

この歌には、「干る間」「寄る(よる)」などの掛詞を通して、「朝」と「夜」との対照関係を導き出したのである。さらに、「流れ(ながれ)」「みるめ」などの縁語と掛詞を利用し、「朝」の泣かれていること、および「夜」の見る目のないことを表現したのである。ここにおいて、『古今集』には意味合いの豊かな対照表現が用いられたことが認められる。このような高度の技巧を持つ対照表現は『万葉集』には認められない。

既に考察してきたように、『古今集』の恋歌には、「朝と夜」、「夢とうつつ」、「昔と今」といった対照表現が認められるが、対照表現とは二つの対立的なものの対照を通して作者の言いたいことを表わしたものである。ところが、『古今集』には、修辞技巧の運用により、こういう対立的なものの属性や特質がさらに鮮明になる。本論で探究してきた時間的な対照表現に即していえば、すなわち時間的なイメージの対立は洗練な修辞技巧を用いることにより、一層強化されていることだといえよう。

以上のように、『万葉集』と『古今集』には時間における取り扱い方の相違が存在しているが、その相違は時間的な対照表現を通して一層明確に描き出されている。

## 第五節 まとめ

以上のように、『万葉集』と『古今集』とを比較することによって、『万葉集』の素朴さと、『古今集』の技巧さが明らかに読み取れるのである。素朴か、技巧的かは、二書で用いられた修辞技巧の難易度と大きく関わっているが、この難易度の違いは、時間的な対照表現にも影響している。

『古今集』における時間的なイメージの対立は、豊かな修辞技巧を通して明らかに表出されているのだが、『万葉集』の修辞法が単純なため、『古今集』のように読者に時間的なイメージの対立を感じさせることができなかった。つまり、『万葉集』と『古今集』には、時間的な対照表現が認められるが、対照の度合いが修辞技巧の難易度によって違っているといえよう。

『古今集』に即して見れば、時間的な対照表現は、恋部の歌々から明確に読み取れるのだが、「朝と夜」との対照は、恋人を待つ「朝」と、恋人と逢う「夜」における心情を示すものであり、「夢とうつつ」との対照は、恋人に逢いたい「夢」と、恋人に逢えない「うつつ」における情緒を語る。そして、「昔と今」との対照は、単に時間の流れの対照ではなく、「昔」への感懐と、「今」への未練を導き出すものである。このようにこれらの対照関係を通して、恋歌の切ないムードが一層強められたのである。

要するに、『古今集』の恋歌においては、平安朝の恋の世界が構築されており、一首一首の歌を詠むことにより、古典的な恋の世界が目の前に再現されるのだが、恋歌の作者が伝えたい心情は「朝と夜」、「夢とうつつ」、「昔と今」といった時間的な対照表現を通して、一層強化されているのである。このことから、時間的な対照表現は、恋歌の切ない情緒を、読者に感動させやすくなる機制であり、古典的な恋の世界に新たな読みを可能にさせたことが認められよう。

本論では、恋歌の本質をはじめ、『古今集』恋歌の本質、『古今集』恋歌における時間的な対照表現などを論じてきた。しかし、『古今集』は恋歌だけではなく、四季の歌も重要であり、さらに、その中でも時間の推移という特質が認

められるのである。ならば、四季の歌は、時間的な対照表現という視点で分析したら如何なるものとなろうか。この視点を通して、四季の歌に関わる新たな視座が見えてくるのか。本論では、これらの問題までに検討を行う余裕がなく、残念なのだが、いつかこれらの問題について考えてみたい。

また、時間的な対照表現について、本論では「朝と夜」、「夢とうつつ」、「昔と今」といった主題を中心に論じたが、この三つの主題以外に、「今と将来」、「長と短」などの主題も認められる。これらの視点を通して、『古今集』の歌を再解釈すれば、新味を出すことができよう。これらの作業も、後日に譲りたい。